



2017年3月6日

報道機関各位

尚綱学院大学放射線研究班・キリスト教保育連盟東北部会放射線・震災特別委員会
「放射能汚染下の防災と減災 -園児を被曝から守る取り組み-」のお知らせ

報道関係者の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素より本学院の教育へご理解・ご協力いただき、誠にありがとうございます。

東日本大震災に引き続いて起こった東電福島第一原子力発電所過酷事故による放射能汚染で被害を被った幼児教育現場の調査結果から、子どもの健康を守るための放射能汚染防災、減災対策について、ブース展示にて発表します。

この6年間、私たち尚綱学院大学放射線研究班(大学・幼稚園教員で構成)は自らの園の汚染状況を調査し、系統的な除染と食品測定を行いながら園児の健康を守ってきました。そればかりでなく、キリスト教保育連盟東北部会放射線・震災特別委員会と共同で、より汚染の深刻な福島県の幼児教育施設を現地調査しました。そこで空間放射線量、土壌や基準野草放射線量を数年にわたり測定し、園内除染の効果や園周囲の汚染水準を測定してきました。また汚染によって大幅に制限された保育活動、特に野外活動の制限が子どもの発達に及ぼす影響についても検討してきました。それらの結果を以下にまとめました。

1. 園敷地放射能汚染の経時的減衰はゆるやかで、大規模な除染が効果をもたらす。
2. 樹木の根元周辺、樹皮、屋外遊具などの汚染は除去が困難で切り倒すなどの抜本的な処置が必要なケースがある。
3. 園周囲法面やその麓、側溝、雨樋排出口付近土壌などの汚染が高いまま経過する傾向があり、山林、屋上の除染をしない限り汚染が尾を引く。
4. 震災後の保育制限から震災後の子どもたちに「虫を怖がる」、「土や砂に触れることを嫌がる」などの”自然剥奪症候群”がみられる。
5. 屋内遊具の設置や園庭に自然を再現するなどの保育の創造的な工夫で上記の課題を克服する努力が保育者によって精力的に進められている。
6. 放射能汚染は数日で曳く津波と異なり、長期にわたって保育活動と子どもの成長発達にダメージを与えることが明らかであり、防災一般の枠組みでとらえるだけでなく発電エネルギー源の選択にさかのぼる防災意識が求められる。

つきましては、報道関係の皆様におかれましても、本発表について是非取材していただきたくお願いいたします。

記

行事名：仙台防災未来フォーラム 2017

日時：3月12日(日) 10:00~18:00

場所：仙台国際センター 展示棟展示室1・2

<本件問合せ先>

尚綱学院大学放射線研究チーム

担当：岩倉 政城 (いわくら まさき)

電話番号：022-381-2270

電子メール：rock-iwakura@shokei.ac.jp